

# 形而上詩誕生の背景

——世紀末諷刺文学および恋愛詩譚

を資料とする試み——

河村 錠一郎

## I

人間の歴史には時間の鋭角を一際鮮烈にみせる時代の接点はいくつかある。16世紀末から17世紀初葉の、西欧における世紀の回転期がその一例であろう。神を真として現実存在を仮像とするか、それとも神を仮像とするか。この問題は別に16-17世紀だけに固有なわけではないが、両極の落差がはじめて深刻な露呈をみせたのがこの時期であるといえよう。こういう状況で詩に期待できることは何か。諷刺詩でもない、寓意詩でもない。時の動きに背を向けた柔弱な恋愛詩（譚）でも、宗教詩のミスティシズムでもない。それは、人間存在の認識を美しく強靱なフォルムに定着すること以外にはない。所謂「17世紀形而上詩人」の特質といえば、彼らが初めてこのことを成したということをおいてほかにはないのである。

といって、この派の代表である John Donne がはじめからしまいまで認識論的な形而上のレベルにあるわけではない。むしろ彼の詩は、もともときわめて形而下的であり私的なもので、われわれはまずこのことを次にみていかなければならない。先回りしていえば、卑近な現実生活への密着の中から、不変ないしは普遍的なものに對置された人間存在の認識が出てくるプロセス、しかも、それが上昇の一方通行でなく、上下往復運動であることに、形而上詩人によって生まれた最良の詩の特質がある、とすべきなのである。

今や何一つ残されてはいない。

あるは、忌わしき汚れの屍のみ。

“Jacobean の劇作家か、あるいは Donne か、と思わせるこの二行は、Marston: *The Scourge of Villanie* (1599 年<sup>\*</sup>) 中の諷刺詩第八篇からの引用である。この二行に先立つ詩句は次の通りである——

What should I say? Lust hath confounded all,  
The brigte glosse of our intellectuall  
Is fouly soyl'd. The wanton wallowing  
In fond delights, and amorous dallying,  
Hath dusk'd the fairest splendour of our soule:  
Nothing now left, but carkas, lothsome, foule. (11. 165-70)

そして、

Our aduerse body, beeing earthly, cold,  
Heaueie, dull, mortall, would not long infold  
A stranger inmate, that was backward still  
To all his dungie, brutish, sensuall will:…… (11. 185-8)

へくると、これはもう Donne の2つの *Anniversarie* (*pub, in 1611 & '2*) と同じだといえる。<sup>\*\*</sup>「今や官能・情欲・色欲が理智の優位性<sup>あたま</sup>を押えてしまった」(Marston 11. 177-8) が、「これこそ今の世のありさま」(Donne: *The First Ann.*, 1. 219) なのである。今こそ ‘our Intellectuall’ soul は、汚濁の世との縁をたち、‘smoakie house of mortall clay’ (Marston 1. 164) なる肉体 ‘first built Cels’ (Donne: *The Second Ann.* 1. 171) を去り、天へ飛翔しなければならない。

And thinke this slow-pac'd soule…  
Dispatches in a minute all the way, …  
At once is at, and through the Firmament. (*The Second Ann.*, 11. 185 ff.)

Marston を引き合いに出したのは、当時の詩人たちの現実(外界)へのかかわりあいを見るためであった。今少し、かのサティリストを援用しよう。諷刺詩第八篇の Praemium はこうはじまる——

In serious iest, and iesting seriousnes  
I striue to scourge poluting beastlines.

\* *The Poems of John Marston* ed. A. Davenport 版に拠った。

\*\* 引用文中の intellectual は soul of sense, soul of growth とならぶ、いわゆる intellectual soul のこと。

I invoke no *Delian* Deitie,  
 Nor sacred of-spring of *Mnemosyne* :  
 I pray in ayde of no *Castalian* Muse,  
 No Nymph, no femall Angell to infuse  
 A sprightly wit to raise my flagging wings,  
 And teach me tune these harsh discordant strings :  
 I craue no Syrens of our *Halcion* times,  
 To grace the accents of my rough-hew'd rimes ;

.....

(11. 1-10)

これが、16世紀のソネットや *Hero & Leander* と *Venus & Adonis* を頂点とする  
 amorous な恋愛詩譚の弄する常套手段への言及であることは間違いない。‘*Delian*  
*Deitie*’ は *Apollo* のことで、‘*Mnemosyne*’ は *Muses* であるが、*Venus & Adonis*  
 の title-page に引かれた *Ovidius* の詩句

‘*Vilia miretur vulgus ; mihi flavus Apollo*  
*Pocula Castalia plena ministret aqua.*’

と次の二つの批評（初めが *Jonson* の *Discoveries*, 次が *Donne* の *To Countess of*  
*Huntingdon*）を並べてみれば、16世紀末の詩壇の状況が浮彫りにされよう。

There be some that are forward, and bold ;..... they will utter, unre-  
 tarded, without any shamefastnesse..... They are, what they are on the sud-  
 den.....they shew presently, like *Graine*, that, scatter'd on the top of the  
 ground shoots up, but takes no root.....Others there are, that have no com-  
 position at all ; but a kind of tuneing, and riming fall in what they  
 write. It runs and slides, and onely makes a sound. *Womens-Poets* they are  
 call'd...\*

...neither will I vex your eyes to see  
 A signing ode, nor cross-armed elegy ;  
 I come not to call pity from your heart  
 Like some white-livered dotard...

Oxford を卒えた *Marston* は 1592 年、20 歳で *Middle Temple* の法学生となる。  
 20 歳の *Donne* は *Cambridge* を出て *Lincoln's Inn* に入った。1586/7 年である。

\* Herford & Simpson 版全集第 8 巻 pp. 584-5。

当時の詩文学の情勢を示すのに、さらに若干の資料をあげると――

But why alas should I that Marble hide  
That doth adorne the one and other flanke,  
From whence a mount of quickned snow doth glide;  
Or els the vale that bounds this milkwhite banke,  
Where Venus and her sisters hide the fount,  
Whose lovely Nectar dooth all sweetes surmount.

これは、T. Lodge の *Scillaes Metamorphosis* 第 53 スタンザからの引用である。<sup>\*</sup> 1589 年のこの Lodge の詩譚を出発として、エロスを題材とする物語詩（ほとんど古典神話に筋や人物を借りている）の流行が、その後 Beaumont の *Salmacis and Hermaphroditus* (1602 pub.) まで続き、その余勢はなお J. Shirley の *Narcissus* と *Echo* の物語である *Narcissus or the Self Lover* (1646) を生む。

1593 年に Marlowe は *H & L* を未完のまま擱筆した。1590 年代、この *H & L* に対する言及は、この種の官能的な恋愛詩譚に対する諷刺の資料としてかなり多くみうけられる。1598 年と少し遅くなるが（もっとも Chapman が Marlowe の後をうけて補筆完成したのが '98 年である）Marston の前記 *S. V.* にかかなり散見されるし、Nashe の遺作 *Lenten Stuffe* (writ. '97, reg. '98/9) の中核部は、*H & L* のパロディとして最も長くまた最も手のこんだものである。1590 年代のこの種の作品のうちめぼしいものを拾ってみる――*Cynthia* by R. Barnfield (registered in 1595), *Cephalus and Procris & Narcissus* by T. Edwards, reg. '93, pub. '95, *Endimion and Phoebe* by Drayton, reg. '95, *Ovidis banquet of sence* by Chapman, pub. '95, これに *Venus & Adonis* の剽窃といわれた T. Heywood の *Oenone and Paris*, pub. '94 をもつけ加えるべきであろう。かくて、Marston が

…Alas poore idle sound,  
Since I first *Phoebus* knew, I neuer found  
Thy interest in sacred Poesie.  
Thou to Invention add'st but surquedry,  
A gaudie ornature, but hast no part,  
In that soule-pleasing high infused art. (S. V., Satyre V, ll. 27-32)

\* *Elizabethan Minor Epics* ed. E. S. Donno 版に拠る。

と批判することになる。

Donne は、*Satyre II* で愛の愁訴を歌うソネッティアーを笑い (ll. 16-7), 量産されるソネットや物語詩がどれも似たり寄ったりである, その剽窃趣味を責める (ll. 25-8)。さて Donne は、その都会の諸悪を描写するが、Marston や Nashe などのように、むきになって真向から ‘Razor’ を振うのではなく、*S. I* では巷へと誘う尻軽な友人、詩人の抵抗と説論、抗しきれずに友人と連れだつ詩人、その二人、とくに友人を待ち受けたもの、という設定によって、Cambridge から London へ出、法学院中心に生活を送る彼の新鮮な何物も見落すまいとする目に、都会の汚濁が映る、そして嘔吐をおぼえている、そういった著者の心象を織り出している。Donne の詩の特徴であるドラマ性が、諷刺詩においても、一人の人間の心象風景を浮彫りするのにも、多少とも資していることは注目してよい。

これよりさき、約 20 年前、*The Steel Glas* で、George Gascoigne が同じような諷刺をしている。彼 Gascoigne も Camb. 出で、1555 年に Gray's Inn に入った。法律には身が入らず、浮名を流したり宮廷に出入りして派手な生活をしたり（この頃書いたと思われるペトルルカ風のソネットやソング、またイタリアン・ノヴェラまがいの物語は 1575 年になって出版された。イギリスにおける都会小説の祖ともいわれるが、それを可能にした社会状況の新しい展開と個人の才能の出会いという意味から注目しておくべきことであろう）、あげくは勘当され、借金のがれに大陸へ逃げ出した。*The Steel Glas* (1575 年起筆) の ‘The Epistle Dedicatorie’ で、彼はそれを若気のあやまちとして悔いている。<sup>\*\*</sup>

## II

実存主義者のクラブがグレコの酒場であるように、ある時代の流行を造った一団の思想家や文学集団には、何らかのクラブがあるようだ。宮廷を中心とする女性的な詩文学と相対立する ‘strong line’ の流行を生んだクラブは他ならぬ Inns of Court であったといえる。Ellrodt は、*Les Pôetes Métaphysiques Anglais* の第Ⅲ巻で、1589/90 年を境にして、Inns of Court の住人の関心が、活動的の面から内面的なものに向かっていることを指摘しているが 16 世紀末の若い文人の動向をざっと表にしてみると以下のようになる。

\* 16-7 世紀の社会状況を論ずるにあたって Nashe が豊富な資料となることについては *Pursuit 5* の拙稿『ナッシュの場合』参照。

\*\* *English Reprints* ed. E. Arber, vol. 5, p. 42.

1586 年	T. Champion	admitted to	Gray's Inn
1586/7	J. Donne	"	Lincoln's Inn
1587	Sir J. Davies	"	Middle Temple
1591	E. Guilpin	"	Gray's Inn
1592	J. Hoskyns	"	Middle Temple
	J. Marston	"	"
1595	Sir H. Wotton	"	"
1597	Sir Thomas Overbury	"	"
1598	W. Herbert	"	Lincoln's Inn

White Hall への最短距離であり、宮廷へ出入する者のいちばん豊富な Inns of Court には、有能な青年や貴族の子弟が集まった。London における、そういう Inns of Court の役割（そこへ来る者はかならずしも法律を専攻する目的を持っていなかった）は、あらためて指摘するまでもないが、Nashe の「英国は人の才能に応じて酬いがあり、生まれ卑しき者にも出世の道があるが、諸外国ではそうになっていない」といった文章などにも当時の London の時代色が見られる<sup>\*</sup>。なかでも 'The Inns of Court' は、16 世紀末、一旗あげんと寄り集まる若いインテリのクラブだったのである。

Nashe などのようにかならずしも Inns of Court に縁を持たないものもあるが、いずれにせよ、青雲の志を抱いた university wits が、依然として世に出ぬまま、裸の生身の人間が鎬を削り、あるいは本能を剥き出しにしている都会の裏と表に通じていくうちに、自分一身の救いを考えざるをえなくなる。形而上も形而下も含めて、種種の面において理想あるいは観念と現実の落差からくる空虚感、焦躁ないし敗北感が、彼らをおそったのである。

...they who write to Lords, rewards to get,

Are they not like singers at doores for meat? (Donne: *Satyre II*, 11. 21-2)

などといっても、激動する世の中に生き残っていくためには、貴人とも高官とも通じなければならない。かかる詩（人）の状況を端的に示すものが、ほかならぬ、Donne の二つの *Anniversarie* であろう。というのは次の三点からである。第（1）に、テーマが、会ったこともない少女の死を悼みその徳性を讃えることである。父の Drury

\* 全集版第 1 巻 p. 178.

卿の *patronage* を確保するためのもので、当時として異常なことではない。第(2)に、表面の構築や詩作の動機はどうあれ、詩本来のテーマは、己れの、ひいては人間存在の形而上的な冥想であり、第(3)に、しかもその己れが、上述したような状況の中で、よりどころとなる重力を失って真空状態に放置された物体のように、不安定に揺れている、ということである。

詩人が讃えているのは Elizabeth Drury であり、彼女に従えと呼びかけ警世の鐘を鳴らすのは世人に対してであるが、詩人の情が熱を帯びるにつれて、瘧のように、‘my soul’ と、自らへの呼びかけが何度もとび出す。‘Thinke, then, my soule, that death is but a groome,……’ (*The Second Ann.* ll. 85-8, cf. 93-101)。Soul と Flesh, 天上と地上にまつわる論証的な行が続く、そのあいまいに、‘Thinke……!’ が度々顔を出す。これは、パトロンの娘の徳性を高めその死後の至福を歌うための自己卑下だけとはいきれないことは、献呈詩としてかなり紋切型の *The First Ann.* とくらべればはっきりする。

詩人が、‘Shee, in whose body……, Shee, whom……, Shee whose rich beauty……, と *she* を真向から讃える時、彼は ‘we’ においてこれを行なう——

Shee, of whose soule, if *we* may say, t’was Gold,  
…… *we* vnderstood

Her by her sight,……

That *one* might almost say, her bodie thought,  
Shee……chides *vs* slow-pac’d snailes,……

Longer, then whil’st *we* beare *our* brittle shell.  
……

If, as *we* were in this *our* liuing Tombe

Oppress’d with ignorance, *we* still were so. (11. 241-53)

(イタリックは筆者)

だが、すぐと例の瘧が始まる——

Poore soule in this thy flesh what do’st thou know. (1. 254)

もう一々 ‘my’ を冠せない。いきなり ‘thy flesh’ という呼び掛け。Donne の心像は透けている。‘soul’ 云々、すでにそれだけで Donne にとっては、‘My soul’ なのである。‘My drowsie soule’ (1. 339) への説論が懸命に続き (But pause, My

soule, and study ere thou fall/On accidental ioyes, th'essentiall), 400-412 行あたりへ来ると、God との対比で 'men' が使われ、ここから Donne は、'we' によって歌い続け、一挙に詩は結ばれる。詩の性質（献上詩ということ）から、その「懸命さ」や「不安」やあるいは己れへの説諭は、形式を繕う冷やかさのためにその厳しい角を矯めてしまっても、たとえば、

……Onely who haue enioyd  
 The sight of God, in fulnesse, can thinke it;  
 For it is both the obiect, and the wit.  
 This is essentiall ioye, where neither hee  
 Can suffer Diminution, nor wee;  
 Tis such a full, and such a filling good; (11. 440-5)

という、平穏な安堵で発せられた affirmation の中にも、'Diminution' の一語が、われわれを落着かなくさせる。Itrat-Husain 氏が、

To Donne "heaven and salvation is not a creation, but a multiplication; it begins not when wee dye, but it increases and dilates itself infinitely then"<sup>1)</sup>……Donne's imagination is ever kindled by the firm belief that he shall see Ged, it is a fact which he never doubted, and then his possession of God shall be timeless and so eternal……\*

(<sup>1)</sup>, *L Sermons*, no. 26)

といっているが、'a fact which he never doubted' とはいいいきれないのだ。G. Herbert の 'O that I once past changing were, /Fast in the Paradise, where no flower can wither!' という願いは祈りであると同時に告白であるが、Donne においても終生あったと、むしろ言うべきではないか。

Inns of Court に生活を置く者からは、たとえば、金儲けのために法律を学ぶ者への軽蔑・諷刺が、体験というか見聞者の言葉として身近かに聞こえてくる (cf. Donne: *Satyre II* 62-76)。都会の汚濁は欲深の法律屋ばかりではない。聖職者にしても同じである。『メランコリーの分析』で、Burton が、国教会の腐敗を解剖し、聖職者の人事が政治的な駆引きや favouritism で行なわれていることを指摘しているが、英国々教会に身を寄せても、国教会でなければならぬという宗教上の信念が確固たるものであったわけではない (cf. *Elegie* 18)。Donne の場合も、その彼の一枚の履

\* *Mystical Elements etc.*, p. 112.



歴を、Burton の指摘したような状況を背中に貼り合わせて透かし読みしなければなるまい。

が、ともかく、身近かな人間社会の混迷、無秩序に対する批判が、卑近な小世界から対象をもっと広く、あるいは根源的に、存在論的にとっていき、人間存在そのものへの嫌悪さえ招き入れるとき、そのプロセスの仲立ちとして、「女」が登場する。世紀の回転に際立つ特徴の一つが、女性への不信と憎悪であることは、その「女」が、「性」あるいは「人間」へと置きかえられ移行する限りにおいて、注目すべきことである。

*Hero.* Fie on this satiety! — 'tis a dull, blunt, weary, and drowsy passion. Who would be a proper fellow to be thus greedily devoured and swallowed among ladies? Faith, 'tis my torment — my very rack! …… would I enuch'd rather than thus suck'd away……

*Herc.*…… Why, all know they are more full of strong desires…… they have more unruly passions than men, and weaker reason to temper those passions than men.

これは Marston の喜劇 *The Fawn* の第四幕第一場の会話である。この Herod が、じつは自分の方でしつこく女を追いかけていることが、後で露見し、観客の哄笑が期待されるのだが、不実なるもの「女」を笑い、その女を追いかける男を笑うことには、ただコメディとして片づけられないものが、たえず背後につきまといっている。「流星など捨てるものか……貞淑な女などに出会えるものか……隣にそういう女がいたとしても知らせてくれるな、俺が着くまでには何人もの男に次々心を変えていよう、いやその知らせの手紙を書く間にも。」若者の皮肉な wit に、その仲間は手を叩いて喜んだであろう。しかし、これはただの wit のすさびだろうか。

諷刺詩人 Marston の出発は、彼自身が後に否定し糾弾した、恋愛詩譚の亜流、*Pigmalion* である。仲間うちで回覧したその処女作を出版する時、彼は *The Scourge of Villanie* 風の諷刺詩を 5 篇つけた。そのプロローグで、前作の *Pigmalion* の弁明をし、かく自らの作品に鞭打ったからは、次に堂々と他人の虚飾を暴露し、諷刺するのだ、といきましている。この 180 度の転回ぶりを Axelrad は、20 歳の若者が彼をとりまくあるいは彼の出入する社会の現実に触れ、それに染まりつつ、いわば嘔吐を覚えるに至ったのだと、解釈している——

……*Pygmalion* n'est pas une parodie. Nous pensons que Marston l'écrivit

sans arrière-pensée satirique. Mais il faut expliquer le changement d'attitude presque immédiat, et l'idée qui vient à l'esprit, c'est qu'un garçon d'une vingtaine d'années, dans certaines conditions, acquiert une connaissance certes discutable, au point de vue moral, des réalités de la vie en société, de nature à lui enlever de nobles et généreuses illusions……\*

Inns of Court を中心に London に群る有能な若者達の関心が、どのようにして内面的な、なかでも Jacobean Drama とか、Strong Line といった傾向の文学に、ぐいぐいと傾斜していったかを、外的 evidence で把握することは困難である。Axelrad は *Malcontent* その他の戯曲作品を援用してこれを果たそうとしている。筆者はもう一度 *The Fawn* から次の passage を引こう——

……O Heaven! that God made for a man no oher means of procreation and maintaining the world peopled but by women! O! that we could increase like roses, by being slipp'd one from another,— or like lilies, procreate with blowing, or any other way than by a woman,……

(Act IV. Scene I, ll. 401-6)

この女性恐怖症めいた文句は、じつは、自分の過度の嫉妬のため、貞淑な若い妻——夫の嫉妬をいいことにわざと疑われ、離縁されて他の男に走るのであるから、やはり、'so feeble and imperfect, inconstant, idle, vain, hollow bubble' (*Ibid.*, l. 421 ff.) なのであるが——に逃げられた老人が、おろおろして嘆く言葉である。この滑稽さは深刻な笑いであり、この中には 16-7 世紀のもっていた一つのテーマが潜んでいる。

### III

'Hermaphrodite'——これがその潜在テーマである。'H.' と一口に言っても、それが同時代の個々の詩人に対してもつ象徴的意義は、それぞれ、大きくあるいは微妙に、異なっている。ここで 16-17 世紀における 'H.' のコンヴェンションを辿りそれを抽出しようとしているわけではない。言葉は何でもよいのである。'Elizabeth-Drury-convention' といってもよいのだ。ただ、それでは時代の概括をするのに、個人的なものに縛られすぎるので、もう少し融通のきく手がかりを使うにすぎない。

\* A. J. Axelrad: *Un Malcontent Elizabethan: John Marston*. 1955, Paris p. 32.

Those arms, such arms ! which me embraced,  
 Me, with immortal cincture girding round  
 Of everlasting bliss ! then bound  
 With her enfolded thighs in mine entangled ;  
 And both in one self-soul placed,  
 Made a *hermaphrodite*, with pleasures ravished !

(Barnes: Madrigal 13, in his *Parthenophil etc.*,\* registered in 1593)

(イタリックは筆者)

‘H.’ といえば、このような erotic な愛の至福の表象か、あるいは Nashe が

Ouid …… picturde inamaratos vnder *Narcissus*: and shrouded a picked  
 effeminate Carpet Knight vnder the fictionate person of *Hermophroditus*……  
 (Nashe: *Fovre Letters. Collected Works* ed. Mackerrow, vol, i, p. 286, ll. 20-  
 3)

と蔑む、「女々しきもの」「でれでれしたもの」の代名詞であるのが、ごく普通の使われ方であるが、たとえば Edmund Spenser の場合、

At last she (ie. Amoret) came vnto the place, where late,  
 She left Sir Scudamour in great distresse,  
 ……  
 Lightly he clipt her twixt his armes twaine,  
 And streightly did embrace her body bright,  
 ……  
 Had ye them seene, ye would haue surely thought,  
 That they had beene that faire *Hermaphrodite*,  
 Which that rich Rommane of white marble wrought,  
 And in his costly Bath causd to bee site:  
 ……

(元来『神仙女王』(1590年版)第三巻の最後を飾るスタンザで、のち、削除されたもの。)

それは単に神話のひきうつしや、単なる官能美のためのものでなく、Spenser 独自の愛の世界の瞬間的顕現になっているのである。

エロスは二種類ある、ヴィナスは二人いる、というのがプラトニック・ラヴの根本

\* *An English Garner* ed. by. E. Arber, (1909), vol. 8 に収められた版より。同書 p. 206。

概念といえよう。Ficino の言葉によれば――

……Venus prima, que in mente est, celo nata sine matre dicitur, quoniam mater apud Physicos materia est. Mens autem illa a materie corporalis consortio est aliena. Secunda Venus, que in mundi anima ponitur, ex Iove est et Dione genita.……Ea siquidem istam creavit potentiam que inferiora hec generat.\*

第一のヴィナスは ‘amore ingenito’ によって神の美を ‘intellegō’ するものであり、第二のヴィナスは ‘amore suo’ によって同じ神の美を肉体において生み出すものである。この二人のヴィナスに、キリスト教の魂の喜びのための肉の犠牲が合流する。Soul - Flesh, Heaven - Earth の対立概念は、二人の Venus の対立概念と混入し、純粹統一への希求は、Herm. と化すことへの希求にその表象をみる。

Let us roll all our Strength, and all  
Our sweetness, up into one Ball (Marvell: *To his Coy Mistress*)

この ‘Ball’ が何であるかはもういうまでもない。官能美の極致に達せられる Herm. は、逆説的に、non-sex の世界となる。

Such was that happy Garden-state,  
While Man there walk'd *without a Mate* :  
After a Place so pure, and sweet,  
What other Help could yet be meet ! (Marvell: *The Garden*)

17 世紀に入って 40 年を経た時点で、Marvell はあきらめ（あるいは理性の悟り）よく

But'twas beyond a Mortal's share  
To wander solitary there :  
Two Paradises 'twere in one  
To live in Paradise alone.

というだけである。最後の 2 行、そして最終スタンザ――何と去勢された Wit ではなかろうか。逆にいえば、明晰な現実容認である。『庭園』の第 7 スタンザまでの

\* *Commentarium Marsili Ficini Florentini* ed. R. Marcel, Belles Lettres, p. 154.

高揚と、そこからの一息での下降は、17世紀の、詩といわず、時代の宿命を思わせる。

Donne の場合はそうはいかなかった。Platon-Ficino と受けつがれ、キリスト教の肉の殉死思想を吸収した、己れの半分を求めて遍歴する愛の哲学は、かの詩人においても、たとえばその *Air and Angels* などに窺える (cf. ll. 1-14)。さらに Ficino の上記引用箇所の続きと *The Extasie* とを比較してみるがよい。per oculos, generō, imāgō, pulchritudo といった用語が Ficino に頻出し、Donne の Our eye-beames, propagation, picture などと比較対照される。一見 Ficino と Donne とで愛の理念が似ているかに思われる。Ficino は二種類の愛を共によしとしている (Amor uterque honestus atque probandus)。なぜならば、共に神の image から生まれるのであるから (Uterque enim divinam imaginem sequitur)。だが、Donne などの形而上詩人にとっては、そのような観念的処理におさまっていられなかった。第一、彼らにとって地上のヴィナスは、もっと人間臭い生なものだ。*The Extasie* を Donne の詩としているのは、やはり 'O alas' 以下であろう (cf. ll. 49-76)。コーダにおける論理にならない論理が、ルネサンス末流の「脆い結び目」たる人間の論理なのである。

#### IV

Donne の *The Songs and Sonnets* には遊興を共にする若者達が戯れに作り合ったという趣きのものが多い。たしかに『流星を拾いにいきな』の唄などはふざけた詩といえる面が顕著だし、『ベッドへおもむく女へ』などは一見ウィットィな艶歌のようである。次は『ベッドへ…』の一部である――

Off with that *girdle*, like heavens Zone glistening,  
But a far fairer world encompassing.  
Unpin that spangled breastplate which you wear  
That th'eyes of busie fooles may be stopt there.  
Unlace your self, for that harmonious chyme,  
Tells me from you, that now 'tis your bed time.  
Off with that happy *bush*, whom I *envie*,  
That still can be, and still can stand so nigh.

(11. 5-12)

(イタリックは筆者)

これに続いて、次の詩句を読み、そのフェティシズムにおける類似性を注目したい

Would I were changed but to my Mistress' gloves,  
 That those white lovely fingers I might hide !  
 That I might kiss those hands, which mine heart loves !  
 Or lese that chain of pearl (her neck's vain pride)  
 Made proud with her neck's veins, that I might fold  
 About that lovely neck, and her paps tickle !  
 Or her to compass, like a belt of gold !

これは前出の Barnes: *Parthenophil* 63 番目のソネットである。Barnes のこういうところを Marston は *S. V. Satyre VIII* で非難しているし、Barnes のこの詩については Nashe も言及して、とくに上記に続くソネットの終結部のポノグラフィックな大胆さを皮肉っている (cf. 全集. vol. 3, p. 103, ll. 21-35)。Marston の上述の箇所には、T. Lodge のソネットへの言及その他、類似の諷刺があり、また

Here's one would be a flea, (iest comicall)  
 Another his sweet Ladies verdingall  
 To clip her tender breech; …… (11. 130-2)

とあるが、この 'flea' は Donne の *The Flea* が作られた背景を窺わせるものではなからうか。

Donne のウィットシズムにしても、医学や天文学の用語にしても、逆説の愛好にしても、ただそれだけのことなら、所謂『17世紀形而上詩人』といわれる人達以外のところに、いわば彼らの詩の生まれる母胎として存在していた。Barnes が出たついでに、彼に例をとれば、'I burn, yet am I cold! I am cold yet burn!' ではじまり、14 行の一行一行がすべてこのような逆説で埋めつくされたソネット 21 とか、女の顔を 'わがカレンダー' に譬え、わが 'Sun days' はあなたの 'smiles,' わが 'Working Days' はあなたの素気なさ、しかめつら、云々のソネット 84 とか、'colon' ごとに私の心はあなたの目からくり出される矢で二つに裂け 'comma' ごとに私は息もたえだえ深い嘆息、そうして 'period' へと急ぐのだが、'interogations' につまずいてばかり、とソネット書きの punctuation を比喩として全篇に用いたエレ

\* ll. 126-7. また l. 134 (Here's one would be his Mistress neck-lace faime, も Barnes への言及であろうが、他の類似の詩人でも同じこと。)

ジー 11 など。

われわれはここでふたたび形而上詩人の代表である Donne の Donne たることへの考察に立ち戻ろう。これをみるには、彼の「愛」の観念、あるいは彼における *Hermaphrodite* の変容をみるしかない、と行ってよかろう。*Air and Angels* でいえば、詩人にとって、愛は、靈的存在のままに神の栄光に包まれて輝く美しきものとはいえず、空的存在である、というのでは困るのである (cf. *some lovely glorious nothing*)。かといって肉感的充足そのものでもない (cf. *Every thy hair for love to work upon/Is much too much, some fitter must be sought……*)。

先に二人の Venus を云々した。それは時間内の世界と無時間あるいは超時間の世界との対置へとすぐに移行する。ロマン派の Keats は人間の官能を、官能であることを失わずに永遠の生命をもつように、いわば冷凍にしようとする。冷凍ではあるが、しかしそれは生々しく、暖かく、切れば血の吹き出るものでなければならぬ。『ギリシャの瓶によす』がその典型として示す、ロマン派特有の子供っぽい、逆にいえば際立って純粹な欲である。いわば二つの Venus の合一を、彼は芸術作品の永遠性と表象性に求めようとした。あるいは、鳥の声に、あるいは詩人の思惟によって変容した大自然の畏怖すべき力と愛情とに。人間の手になる彼ら自身の神話の中に。

17 世紀の詩人にはそれができなかった。人間は神ではない。神にはなれず、しかも動物ではないという、宙ぶらりんの状態——「存在の偉大なる鎖」にあって、上と下の両方の重力にひっぱられてちぎれそうになっている（「上への重力」とは 17 世紀的表現だが、さらにいえば、両方からの重力ということは無重力状態と同じである）。アイデンティフィケーション喪失の不安感。恋を唄う「ソネット」という伝統形式の枠の中ではあるが、Donne が恋人を通して自分と他の人間との連帯を執拗に求めていることに注目すべきだ。Ellrodt のイギリス形而上詩人における 'Conscience-de-soi' の研究は、これに対する鋭敏な反応から始まっている。連帯を、合一を、同化を求める対象は、じつは神であったことを、Donne の晩年は告白してしまう。(Herbert にあってはいうまでもない)。だからこそ 17 世紀の人間には、天上と地上との距離感が痛々しいほど激しくなり、

Philosophers have measur'd mountains,  
Fathom'd the depths of seas, of states, and kings,  
Walk'd with a staffe to heav'n, and traced fountains:  
But there are two vast, spacious things,  
The which to measure it doth more behove:

Yet few there are that sound them; Sinne and Love.\*

Lord,……

O let me rise

As larks, harmoniously,

And sing this day thy victories:

Then shall the fall further the flight in me.\*\*

はるかなるものと卑近なもの、人間的なものが、witの巧みによって強引にしかもみごとに結ばれ、論理ならぬ論理をもち、形而上的なimageの氾濫する詩が生まれる。それは、あたかも神と動物というとてもない落差によって生じるエネルギーをもって、一瞬の閃光と電撃のうちに、全く性質の異なる二種の金属板を、化学反応的に接着する近代工学の成果をみるようなものだ。その離れ業が、戯文の形式の中においてなされるからこそ、遊郭における手すさびの歌のような趣きでなされるからこそ、かえって、存在の深淵に自らの身をもって橋をかけようとする者の、心理的な諸々のゼスチュア、拗ねたり皮肉ったり居直ったり、おどけて見せたり笑いとばして見せたり、あるいは、ふと真顔に人の愛情を恋うたり確かめたりする、諸々の心の動き、精神の襲が、言語を媒介に輪郭の強い映像を結び、今日なお、読者に真摯な受容を迫るのである。

\* G. Herbert: *The Agonie*.

\*\* 同じく *Easter-wings*.